

長沖一 略年譜・主要作品（未定稿）

永岡正己

はしがき

長沖一（ながおき・まこと 一九〇四年一月三〇日―一九七六年八月五日）は、大阪を代表する作家の一人であった。昭和初期の学生時代に同人誌『辻馬車』に発表した作品によって注目され、藤澤桓夫や武田麟太郎とともに、新感覚派からプロレタリア文学へと推移してゆく当時の新しい世代の文学として注目された。そして当時の労働運動の困難と新たな展開を求める状況、文壇で注目されたであろう『肉体交響楽』が掲載不可になった不運も重なって、長沖一は秋田實の呼びかけに応じて東京での活動を終えて大阪に戻り、吉本興業で活動することとなった。藤澤も武田も長沖が再び小説を書くのを待ち続けた。戦争が終わり、武田が亡くなって、長沖一は、病气から回復したのち一気に書き始めた。戦争の中で起こった出来事、戦後の健康な生活の姿、普通の人々の視

座からさまざまな形で作品を書き進めた。その中に放送の仕事も含まれた。占領期が終わって自由な放送が可能になる中で、一九五二年に『アチャコ青春手帖』、そして一九五四年から始まった『お父さんはお人好し』によって、その名は全国に知られるようになった。それからの歩みは、放送作家、大学教授としての面が中心となっていた。長沖の戦前の活動は、秋田實とともに取り上げられるようになってきているが、長沖一の仕事の全貌はまだ明らかにされていない。とくに戦前から戦後初期にかけての作品群の評価はなされていない。また、戦前と戦後の作品的関係についての検討もこれからの課題と考えられる。

本資料は、二〇一六年六月一九日、第二回帝塚山派文学学会の定例研究会（帝塚山学院住吉校舎）で「長沖一の生涯と文学世界」と題して発表させていただいた報告の資料として配布したものであり、今回掲載にあたり若干の訂正加筆をおこなった。当日配布したレジュメは省略した。「長沖一の生涯と文学世界」に関する論は、別途発表する予定であるが、今回、戦後大阪文学の展開において重要な役割を担い、多面的に活躍した長沖一の理解に役立つと考え「年譜・主要作品」のみにここに掲載させていただいた。

この資料は、長沖一氏が逝去されたあと、何度かお宅にお訪ねして見せていただいたノート、コピー、長沖家所蔵資料・原稿類をもとにしている。幸いにも筆者は帝塚山に住んでおられた頃から長沖家と親しくさせていただき、長沖一の普段の生活にいつも身近に接することができた。生前このようなお話をさせていただくことはごく断片的にしかなかった。しかし、ご逝去のあと、あらためてその足跡をまともめたいと希望し、書齋にある本や書類を見せていただくことになった。そのような経過で、奥様の長沖和子氏、長男・博氏、次男・渉氏から過去にお聞きしたことがこの作業のもとにある。戦前・戦後初期のことについては、長沖一氏逝去後の一九七〇年代末から八〇年代前半にかけて藤澤桓夫氏、小野勇氏、古藤敏夫氏、浜田善盛氏ほかの方々は何度か聞き取りをさせていただいたことがあり、その時の記録によって補った。

作成にあたって「長沖一年譜」「長沖一作品目録」(『文学雑誌』第55号、長沖一追悼号、一九七七年四月、60―65頁所収)および長沖和子作成による補筆年譜(二〇〇一年三月)、長沖一『上方笑芸見聞録』を中心に、長沖一の回想を含む小説・随筆類、関西大学図書館特別文庫所蔵長沖一資料(長沖家寄贈)、大阪府立中之島図書館藤澤文庫・織田文庫、帝塚山学院大学図書館、日本近代文学館、国立国会図書館、同憲政資料室(プランゲ文庫)、国際児童文学館、大宅壮一文庫、大阪府立上方演芸資料館他、各地の図書館所蔵雑誌、友人や関係者の回想、関係文献等にもとづき大幅に修正・加筆した。

長沖博氏はじめ長沖家の皆様からも詳しくご教示をいただいた。現在、資料整理作業の途中であり、新聞に執筆したものや単発の放送など割愛したものが多数ある。またスクラップブック、アルバムに切り抜きが収録されている掲載誌・年月日不明の作品・原稿類、短文、書評・随筆等もここには一部しか記載していない。今後全体を整理・確定した上で改訂したい。

1904年(明治37年) 当歳

一月三〇日 大阪市南区北炭屋町(島之内)に生まれる。父・英一、母・さとの長男(次男・彰、長女・静、三男・澄、四男・勲、五男・通)。祖父が加賀から大阪へ出て、「大小を棄てて鬻を切つて商売をはじめた」が、父の代には商売をやめていた。母は和歌山の出身であった。表には南側に雑穀屋、鋦屋、酒屋、北側に髪文字屋があり、「かもじ屋と雑穀屋のあいだに奥深い路地があり、その路地の奥に、ぼくの家があった。天窓のある、広い台所があり」、「裏は(西)横堀川に面していたから、台所の流し場は川に開いた水門の石段の上であり、その水門のちょうど上は、二階とは別に、書斎風の中二階になっていた。」「父は商家に生まれながら、学問、しかも数学が好きで、「自分の代になつてから独学で数学を勉強したり、その必要上フランス語を習つたりした人だ

から、——円筒になったフランス語のレコードや、ラッパのついた蓄音器があつて、幼いぼくの玩具になつていた。——芝居、ことに歌舞伎などにはまるで興味も趣味もなかつた。「その代り、父は、本や雑誌はいくら読んでもよいといつた。」「ぼくが小説などを書くような人間になつたのも——これも父の期待しなかつたにちがいないことで、親不孝だが——あるいは、そんな幼年時代の影響かも知れない。」「母を語る 子供に捧げた生命」「婦人生活」一九五〇年六月、193—194頁）この年、二月に日露戦争が起こる（一八九〇五）

10年（明治43年） 6歳

四月 御津尋常小学校入学（同校は一九四四年、御津国民学校時代に大宝国民学校と統合、一九八七年大宝、道仁、芦池小学校が統合され市立南小学校となる）。同級生は心齋橋筋を中心とした商人の子弟が多かつたといわれる。五月 大逆事件検挙始まる（翌年一月判決）、八月韓国併合

14年（大正3年） 10歳

七月 第一次世界大戦起る（一八九一八）。この年、南海沿線の玉出に転居（のち中学校時代に諏訪森の浜尾町に転居、さらに大高時代に姫松に転居している）。学校では一九一二年に赴任し河内長野から通勤していた中島正吾訓導の影響を受けた。七月三十一日、妹・静誕生。

16年（大正5年） 12歳

四月 府立天王寺中学校入学（第23回生）。同学年に小野十三郎（藤三郎）、小出卓二、同級生に石田英一郎、後藤武美らがいた。長沖は剣道、小野は柔道をした。（なお、弟の彰は一九二六年卒、のち慶応大に進学。澄は

一九三四年卒、のち大阪商科大に進学)。一九一八年、第一次世界大戦終結。本格的な政党内閣、労働運動も生まれ、大正デモクラシーの思潮広まる。

21年(大正10年) 17歳

三月 天王寺中学校卒業(小野、小出、後藤武美、崎山正毅ら共に卒業)。三高受験に失敗。

22年(大正11年) 18歳

三月 三高の受験に再度失敗。この年、大阪高等学校開校

23年(大正12年) 19歳

四月 大阪高等学校文科乙類に入学(2期生)。一年以上級に藤澤桓夫、小野勇、崎山正毅、同級生に林廣次(秋田實)、上道直夫、中山正善らがいた。在学中、「日野月明喜先生やローベルト・シンチンゲル先生等が印象深かった」(『大高』86-87頁)。九月 関東大震災(東京帝大学生救護団結成、東京帝大セツルメントとなる)

この年、藤澤、小野勇、神崎清、崎山正毅が回覧雑誌『獵人』発行(2号まで)。その後、詩誌『龍舫』を藤澤、小野勇、神崎で発行(小出極重に表紙を描いてもらう。6号まで刊行)。

九月 長沖、林廣次、日比野貞蔵、竹越和夫、滝内芳太郎、宇崎七五三夫、上道直夫と回覧同人誌『花冠』発刊。長沖、詩「満月断想」、「夏の風景画」、「空にながるる感情」、「はなやかな炎を求む」の四編掲載。一〇月『花冠』2号に戯曲「途上」、詩「青い月夜」、「空」、「白雨」、「やさしい祈り」、「夕焼」を発表。一二月『花冠』4号に初めての小説「窓から」発表(長興一の筆名)

24年（大正13年）20歳

二月『龍舫』4号に詩「夜景」「雨」「千代紙人形一曲」和夫に」三編発表。四月『龍舫』6号に詩「太陽の叙情詩」「朱唇」（くち）二編発表。七月『龍舫』の三人にクラスの仲間と、崎山猷逸、田中健三、小野十三郎が加わり同人誌『傾斜市街』発刊。この年、徴兵検査があり、甲種合格となる（同時に受けた小野勇は第二乙種合格であった）。

25年（大正14年）21歳

三月 藤澤桓夫ら大高の仲間たちを中心に『辻馬車』発刊（表紙は小出楯重、創刊同人は小野勇、神崎清、田中健三、中川六郎、上道直夫、福井一、藤澤桓夫、崎山猷逸、崎山正毅。発行所は波屋書房、編集兼発行人は波屋書房の宇崎祥二。一九二七年一〇月 3巻10号、通巻32号まで続く。長沖は三年目の一九二七年一月から執筆に参加し七月編集同人となる）四月 治安維持法、五月、普通選挙法公布。

26年（大正15年）22歳

三月 大阪高等学校卒業、四月 東京帝国大学文学部美学美術史学科入学。東京帝大新人会に加入（新人会は一九一八年一二月吉野作造等によって結成。当時、後期新人会の時代で、社会運動の拠点の一つであったが、福本イズムが強まる時期であった。この年労農党など結成）。

八月 竹越和夫らと『火戯』発刊（同人は竹越、長沖ら五名）、詩「黒い野薔薇——酸化風景画稿」発表。九月以降「火戯」に小説「時圭」、「鼻血」発表。

27年(昭和2年) 23歳

三月 金融恐慌、三月『辻馬車』25号から武田麟太郎参加(編集責任者は小野勇、神崎、崎山正毅、武田)。同誌はプロレタリア文学の色調を強める。七月、同第29号から長沖、編集責任者に加わる(六名。31号で崎山正毅、上野が退き四名体制となり、創立同人は小野、神崎だけとなる)。七月、武田麟太郎を中心に社会科学研究会を開く。

『辻馬車』1月号(3巻1号、23号)に「口笛」発表。続いて4月号(3巻4号)に「桃」、6月号(3巻6号)に「ポプラ」、7月号(3巻7号)に「労働者」、9月号(3巻9号)に「踊る中尉」、「断想——文芸上の極北、或は『文芸的な余りに文芸的な』に就いて」発表。10月号の橋本スミ(武田麟太郎)のアナキストを批判した巻頭詩「女給仕は云つてやる」に対してアナキストからの攻撃があり、編集責任者の宇崎が襲われ、後病死。この号で、長沖は文芸誌9月号の注目作品として『無産者新聞』10号の中野重治と『辻馬車』9月号の橋本スミの詩を挙げた。

この年『擲弾兵』(波屋書房、翌年一月、発行所東京へ)創刊。新人会で読書会等の中心メンバーとして活動、新人会を通して労働運動に参加し、プロレタリア文学の方向を追求する。この時期には、横光利一、石浜金作、川端康成らと野球チームを結成し参加(左翼)、築地小劇場の公演等もよく見に行つたと回想されている(「わが青春の糧」)

28年(昭和3年) 24歳

三月 三・一五事件起る(治安維持法により共産党、労働党関係者等一斉検挙)。日本労働組合評議会解散命令。四月 林(秋田實)、大高を卒業し東京帝大文学部支那学科入学。交流深まる。本郷の長栄館で共同生活始まる(長

栄館にはそれまで武田、藤澤、河崎長らがついて文学活動の拠点であった。三月 全日本無産者芸術連盟（ナツプ）結成、五月「戦旗」創刊。林、編集に携わる。長沖参加。

一月『創作月刊』（2巻1号、菊池寛主宰）に「豹」発表。三月『1928』創刊（小野松一、河崎長ら）、四月『1928』2号に短文「河崎君の『街角の影』を讀んで」。四月「帝大同人雑誌聯盟・討論会」が『文芸公論』2巻4号に掲載され話題となる。『辻馬車』から神崎、長沖、武田の三名出席。他に舟橋聖一ら同人誌関係者一名、計一四名（長沖は神崎の「新思潮」への執拗な批判を制止している）。六月『イスクラ』（花火）創刊号（松田伊之介編）に「夜」執筆。六月四日、評論「それぞれの立場」（『帝国大学新聞』25号）、七月『大学左派』発刊、同人となる（帝大同人雑誌連盟、『辻馬車』など統合。創刊記念の懇談会開催。創刊号で内野壮児が長沖の「夜」を高く評価）。七月「一つの経験——左翼シネアスト諸君に」（『大学左派』1巻2号）発表。一二月一七日「新しき星」（『帝国大学新聞』27号）発表。この頃直木三十五、池谷信三郎の『文芸創作講座』（文芸春秋社、同年第1号の後一九三四年にかけて継続刊行）等の口述筆記を行う（「一幕物戯曲研究」など）。この年、詩「女房」、小説「挟まった役割」発表。「労働者」「夜」等によって注目される。

一二月 日本労働組合全国協議会（全協）結成。秋田、長沖ら新人会から全協に派遣され、産別の金属労働組合で組織、情宣活動をする。

29年（昭和4年）25歳

二月 プロレタリア作家同盟（ナルプ）結成、参加（『新人会員の足跡』、「明日の文壇を觀る」）。三月 東京帝大文学部美術史学科卒業。卒業論文は「映画芸術論の成立」であった（同年度卒業には白井吉見がいる。神崎、小野、崎山の他、小林秀雄、今日出海、中島健蔵らも前年度卒）。四月 日本共産党全国検挙（四・一六

事件)。七月 田中清玄、共産党委員長となり武装路線に向かう。秋の終り、伊豆湯ヶ島の湯本館に滞在中の藤澤桓夫（三月から療養。梶井基次郎、宇野千代も滞在）を見舞い、藤澤に付き添い、口述筆記をして翌年の入営前日まで約二か月付添い、卒業を援助する（『私の大阪』242-243頁他）。卒業後、文芸春秋の「創作入門講座」、直木三十五、池谷信三郎らの下請の仕事もする。九月 世界恐慌（日本は翌々年にかけて失業と農業恐慌、窮乏化が広がる）。一月 「新人会解体に関する声明書」発表される。

一月 「敵」を『大学左派』2巻1号に発表。（一月藤澤、「大学生Nの寝言」で長沖のことを描く。）二月 「ヤニングス余談」（『松竹座グラフィック』10巻2号）、五月六日「中本たか子その他」（『帝国大学新聞』295号）、六月 木村利美、林廣次（熊王）、高見順らと『十月』を創刊。六月「母子一景」を『十月』1巻1号に発表。（木村利美が同誌1巻2号で「母子一景」を評価し詳しく批評した。）、六月「『暴力』の発表その他」（『1929』2巻6号）を発表、武田麟太郎の『暴力』の「よきテンポと、適確と、明快と」を高く評価した。（川端康成は、この長沖の批評を取り上げて『文芸春秋』7月号で批判した。）

一月 「愛情」を『1929』2巻11号に発表。他に『1929』5月号に「州にて」、「イスクラ」7・8月号に「学校行政」。この年、「無題中より」（のち「自由大学生の歌」、「帰る」と改題。自筆訂正加筆）発表。蔵原惟人が、藤澤、長沖、武田らを論じる（『明日の文壇を観る』読売新聞二月三日）²。

30年（昭和5年） 26歳

一月 小説「避病舎」を『文学』4号に発表、シナリオ「ブルジョアの結婚」を『映画往来』6巻1号に発表（トルストイの翻案。長沖は「文壇の新鋭」として紹介されている。『1930』3巻1号（23号）の宇崎祥二追悼特集に「不快な挿話」発表。

二月 父から入営日を知らせる電報あり、前日に帰阪。大阪歩兵第三十七連隊に甲種幹部候補生として約十ヵ月入営。三月、藤澤桓夫卒業（卒論は「芥川龍之介論」であった）。

この年、七月に林熊王（秋田實）、水町三郎、高見順、小野勇ら『集団』創刊（長沖は入営中のため同人には参加していない）。一二月「職場から」を「月島××工場N生」の名で発表（『集団』1巻5号*推定）。除隊後、富士見高原療養所（正木不如丘院長）で療養中の藤澤桓夫（菊池寛の紹介により入院。同療養所記録には三月二八日から一二月二〇日まで入院とある）を見舞って約一ヵ月滞在。新聞連載小説等の口述筆記も行なう（堀辰雄は藤澤の紹介で入院した）。

31年（昭和6年） 27歳

この年、東京で文筆活動を行ないつつ林（秋田）と労働運動に協力して活動を続ける。『犯罪公論』（一九三一年一〇月創刊、田中直樹編集）などに林とともに執筆。この時期、小野勇（当時東京府立園芸学校の英語教師）の援助を受ける。当時、鍋井克之や黒田重太郎と寄席にも足を運んでいたと言われる（花菱アチャコ『遊芸稼人——アチャコ泣き笑い半世紀』）、九月、満州事変勃発。

32年（昭和7年） 28歳

三月 妹・静、夕陽丘高女を卒業（タイプを修得し、スイスバーゼル社に勤務）。六月、全協青年部の機関紙「労働青年」に、コント執筆を始める。青年部長だった戎谷春松が、全協で活動していた秋田に依頼し、その紹介で執筆を引受ける。非合法活動であったが、堂々と喫茶店で会っている。のち一九四九年一月に阿倍野区の民家で共産党の企画した文化人、作家の集まりがあった時に長沖は戎谷と会った。戎谷は長沖について、うつむき加減

で、長身、長髪と記している（戎谷春松「秋田実・長沖一の思い出——秋田実の七回忌によせて・下」『大阪民報』一九八四・一〇・一三日号、2539号、七面。ただし浜田善盛や丹羽道雄により訂正された見解もある）。三月、満州国建国発表。五月、五・一五事件。一〇月、熱海事件で共産党関係者一斉検挙。

この年、二月「短い読物文芸に就いて」（『帝国大学新聞』48号。広範な民衆の芸術の必要を述べ、森一（秋田）の作品を評価した）、六月、『犯罪公論』2巻6号に「我国に於ける労働祭の暦を繰る」、八月 同2巻8号に「社会の混沌期に於ける犯罪——犯罪時評——」、九月 同2巻9号に小説「妻」（白杵藩文化一揆の義民・弁指曾右衛門の話）発表。

33年（昭和8年）29歳

林（秋田）と本郷の長栄館での生活を続け、文筆活動と労働・社会運動（工場労働者の組織、機関紙など）に従事する。直木三十五らの『文芸創作講座』等の執筆を手伝い、文壇の人々との交流を行なう。二月 小林多喜二、築地署で虐殺される。三月 大宅壮一主宰の『人物評論』創刊、ルポ、記事を書く。この年、小野勇、水町三郎、林熊王、中野大次郎（筆名・永野貢。大学の後輩で『大学左派』『集団』等同人、プロレタリア文学の同志で全協の活動にも加わった）らと文学雑誌『標識』刊行を準備するが実現せず。六月、佐野・鍋山転向声明。七月 東京外国語学校ロシア語講習会に中野とともに参加（『中野大次郎遺稿集』）。一二月 共産党スパイ「査問」事件起こる。

五月（文芸時評）「技術に就いて——最近の二三の感想——」（『帝国大学新聞』482号。「プロレタリア実話」、藤澤、武田らにふれる）など執筆。

34年（昭和9年） 30歳

全協の活動を続けるが、弾圧と内部対立で壊滅状態となる。九月、室戸台風で関西地方被災。一〇月、秋田實大阪へ帰る。十一月、日本労働組合全国評議会結成、一二月一二日 中野大次郎急死。一二、一三両日東京で通夜、一五日福島県平で葬儀（秋田は大阪から駆けつける）。長沖は最初に連絡を受けて駆けつけ、桜井武雄、稲葉信之に伝えた。中野の残した資料は長栄館の長沖のところに運び込まれた。この時期、菊池寛の原稿などさまざまな仕事を行う。一月（文芸時評）「作家生活と十二月の作品」（『帝国大学新聞』51号。徳永直、平田小六、渋谷駿らを取り上げる。）

35年（昭和10年） 31歳

春頃から大阪に拠点を移す。当時、運動弾圧・壊滅後、反ファシズム統一戦線運動が関西で進められていた（内野壮児や浜田善盛ら関係）。一月 菊池寛の手伝いをする。四月 小岩井浄、加藤勘十ら『労働雑誌』創刊（労働雑誌社、編集人・小岩井、編集実務・内野壮児）、五月 『中野大次郎遺稿集』刊行（稲葉信之編。長沖、編集作業を行い、追悼文「本郷・大森」執筆の他、「略譜」をまとめた）。八月 大衆娯楽雑誌『ヨシモト』発刊（編集者・林廣次（秋田）、発行人・橋本鐵彦、吉田留三郎、長沖の四名、実質の編集は長沖であった。一九三七年7月号までで終刊）。東京と大阪を行き来して秋田とともに吉本興業の仕事にあたる（のち文芸部には吉田留三郎、穂村正治ら集まる）。

二月「嫌りぬ停滞——黒島傳治『血縁』（文藝）」（『帝国大学新聞』563号、「遮断機」欄）発表。一〇月一五日、「肉体交響楽」脱稿（81枚、一九三〇年の入営時の体験をもとに書いたもの。原稿末尾に脱稿日記載）、『中央公論』の依頼により送るが、その後二・二六事件と重なり軍隊批判の内容のため検閲を恐れ掲載不可となる（この原

稿が編集者の手に送られると同時に、二・二六事件が起つた。彼の作品は発表不可能となつた。「藤澤桓夫」「恵まれた私の交友録」「新生日本」一九四六年八月号、63頁)。掲載予定だった同誌には武田、林房雄らの作品が掲載され、新鋭作家特集も組まれている。

36年(昭和11年) 32歳

一月 労働雑誌社関西支局開設(一二月に関係者一斉検挙される)。二月、二・二六事件起る。二月 吉本興業、第1回新作発表漫才研究会開催、浪花座で「あきれた連中」舞台公演。この年末の長沖の現住所は住吉区住吉町となっている。

37年(昭和12年) 33歳

一月二日 東京の生活をすべて終えて帰阪(長沖和子メモに桜井武雄談とあり)³⁾。吉本興業の文芸部長となる(一九四七年三月まで勤務。当時秋田は顧問とされているが秋田が部長との記載もある)。一月『アサヒスポーツ』一月第2号に「慶京ラグビー観戦記 元日楽し初試合」執筆。三月に秋田、漫才学校開設する。講師として秋田を手伝う。七月七日 盧溝橋事件(日中戦争始まる)、中国大陸に戦線拡大。七月、『ヨシモト』3巻7号で終刊。また軽演劇の台本も手がける。一二月一日 長沖一「室津港」大阪中央放送局よりラジオ「おやつの時間」で放送(お夏清十郎の物語、西鶴、五人女などにふれる。十代に東京に行った時『実事譚』を古書店で買ったことが語られている)。

38年(昭和13年) 34歳

一月一四日 第一回演芸班戦地慰問団「わらわし隊」、朝日新聞と提携して実施。北京、天津、石家荘等を慰問し、二月一三日長崎に帰国（「わらわし隊」名付け親は長沖）。一月二七日演芸慰問隊「わらわし隊」第2回中支慰問班、上海、南京、漢口等の戦地を巡回。長沖引率する。二月二七日門司港に帰国。（同年一二月南支慰問団、その後も戦地慰問が続けられ、一九四一年まで続いた。同年一月には花園愛子が銃撃を受け死亡した。）『上方笑芸見聞録』および『吉本80年史』早坂隆著など。四月、国家総動員法、戦時体制強まる。

一二月二日の消印で上海から藤澤に葉書送る。「無事着。船には案外強かった。これから先はしらないが、支那は第一印象とてもいい。明後日奥地へ立ちます。石浜様にもよろしく。ではまた。」（特別文庫所蔵）（この頃、秋田、「笑いの素研究所」開設。長沖、吉田ら協力。）

39年（昭和14年） 35歳

五月 ノモンハン事件。吉本興業文芸部で仕事を続ける。軽演劇の台本執筆や漫才師等の指導、相談を担当する。四月 『寮歌集』刊（大高凶南寮）、大高時代作の「庭球部部歌」収録。

40年（昭和15年） 36歳

引き続き吉本興業の仕事に従事する。九月 日独伊三国同盟、一〇月 大政翼賛会結成。四月 「写真家漫訪記」（『アサヒカメラ』168号）。

41年（昭和16年） 37歳

七月二三日 召集令状。応召（家族と秋田、藤澤らが見送る。出征記念の寄書に秋田は「少尉貧乏（小遣は心

配するな) 廣「藤澤は「そのかみの伊豆の温泉に酒くらひ羊羹たべしまじと一忘れず 桓」と書いた。また織田作之助は「沖に出て 恋の長さや 星一つ 作之助」という句を書いた)。二九日篠山部隊に入隊。八月、朝鮮咸鏡北道の雄基第二十二部隊(大山隊)に配属となり、京城から豆満江の龍山部隊に入り、十一月 図們江畔に分遣され国境守備隊の小隊長となる。沿海州占領まで国境死守せよとの命令が下る。二月八日太平洋戦争開始によりソ連国境の最前線の危機は終わる。

七月「雷鳴虎列の戦話」『大阪バック』(36巻8号)に発表(「わらわし隊」での経験を題材としたもの)。

42年(昭和17年) 38歳

七月二日 妹・静急逝。戦地で電報を受け取るが、帰ることもできず、兵舎で桔梗の花を手向けた(弟の澄も満州第三一二部隊寺東隊に出征中)。召集解除により二月二〇日帰阪。この間、藤澤らに近況、雑誌の感想を送っている(二月、三月、五月、九月、十一月。九月には戦地で撮った写真も同封。手紙の差出は三月、五月は雄基朝鮮第七十一部隊、大山隊、十一月は朝鮮咸北雄基朝鮮第七四〇二部隊、大山隊。なお、二月二三日に書いた手紙は「大阪文学」に藤澤と編集の田島義男が相談して掲載した)。四月「若い人たちに——藤澤桓夫氏への手紙——」(『大阪文学』2巻4号)掲載。その後、小野勇から戦地の長沖に宛てて、文学界が風俗小説一点張りになっている状況を憂える葉書が届けられた。

43年(昭和18年) 39歳

七月『ガーベラ——長沖静嬢追悼文集』刊(増田敏子編、長沖「妹へ」、父の「手向草」(短歌)、藤澤の「思ひ出」、友人や恩師の追悼文収録)。一月二三日、皆吉和子と結婚(皆吉家は茨城県出身で水戸藩の出。父・皆

吉質は大阪帝大医学部出身で学校衛生に尽力した。台湾総督府勤務のち帰国し道明寺に居住。媒酌人は秋田實。近鉄百貨店で披露宴。

44年（昭和19年） 40歳

春、再度の応召で和歌山の中部第二十四部隊に入隊。以後翌年まで陸軍中尉として兵役に従事し敗戦のちも解除命令まで留まる。当時の従軍生活はのちの小説の題材となった。

五月二五日付で藤澤桓夫から長沖宛で葉書（住吉区墨江から帝塚山東一丁目二五あて。五月二三日の筆で「昨日は失礼」と書いている。）武田麟太郎が、長沖が作品を書いたことを知り喜ぶ。

45年（昭和20年） 41歳

一月「蟹と月の話」（『新文学』2巻2号、巻頭作品）発表（河原義夫の編集後記に「すでに定評のある人、川崎長太郎氏の「木の芽」とともに味読されたい」とある。本作品を見て藤澤、武田はじめ関係者は長沖の健筆を喜んだ）。八月、敗戦、一ヶ月のち兵役解除され、吉本興業に復社した。九月、GHQの検閲始まり、台本等の英訳にもあたる。

46年（昭和21年） 42歳

二月末、発疹チフスに罹患し、三月末まで病臥（三月一〇日には井葉野篤三が同じ病気で逝去している）。三月三二日武田麟太郎死去。病氣回復後、それまでの時間を取り戻すように執筆活動を本格化し、戦時下の経験や敗戦後の生活の作品化を構想する。藤澤は「お互ひに身体を大切にするより他はない。そして出来るだけよい仕

事をしよう。君も、今度の大患を境に、きつとその肚をきめてくれたことと思ふ」と手紙に書いた。藤澤はその後、長沖の新聞連載や東京の雑誌への執筆を何度も促した。(二月頃、小野十三郎、長沖の紹介で吉本興業文芸部に翌年まで勤務する。)

一〇月 長女・民子生まれる。この年、帝塚山学院の女子自由大学の講師となる。

病氣回復後一氣に書き始める。五月「けちんぼう美談——『滑稽譚』のうち」(掲載誌不明。末尾に46・5・10の日付)。六月「遺書」(『東西』1巻3号)発表。六月「若い頃——武田麟太郎との交友覚え書——」(『文化人』1巻5号、5・6月号、関西文化人倶楽部)。六月「春」(『新文学研究』復刊第1輯)発表(末尾に46・6・14の日付)。六月「漫才学校不始末記」(『物語』6月号)、七月「万事休した男」(『アサヒグラフ』46・7・25号、のち『大阪の女』に収録)。七月「愛は金なり」(『ゴールド』創刊号)。「砂糖百斤薯四五貫」(『特ダネ』7月8日号、西鶴『萬の文反古』の現代版)。八月「大阪のサラリーマン」(『瀬戸内海』1巻2号。のち『大阪の女』に収録)。九月「砂の上」を『文化人』1巻6号に発表するが、GHQの検閲により掲載不可となる。一〇月「母親」(『瀬戸内海』1巻3号)。一〇月「ワカナのこと」(『芸能往来』1巻6号)。一一月 藤澤桓夫を中心として『文学雑誌』創刊。編集を長沖が担当し後記も書く。同誌1号に「眼鏡の中」発表(脱稿は四六年六月)。一一月「柿は甘し」(『顔』(VISAGE)1巻1号)。一二月コント「靴とスカート」発表(『四国春秋』1巻9号。のち『大阪の人』に収録)。「秋の感情」(『ホームサイエンス』1巻2号)。「聖女」(『国際女性』4号、11・12月号)。この年、『読物と漫画』に「楽屋口」など執筆(『大阪の女』に収録)の短編、「煙草」(『大阪日日新聞』七月八日)などの随筆を発表⁴。

九月 映画『街の野獣』(松竹、佐分利信他)公開(長沖原作)。

八月に毎日新聞学芸部の井上靖から速達で原稿返却のお詫び状届く。「遺書」発表後、織田作之助から感想の

書簡届く。八月、藤澤桓夫、『新生日本』一九四六年8月号（通巻223号、大阪新聞社）に「恵まれた私の交友録——東京の人・大阪の人——」で戦前・戦時の長沖と「避病舎」「肉体交響楽」等について書き、悲運の人と嘆き期待を述べた。

この年、「当世胸算用 或いはなにわのジャンヌダルク物語」（脱稿は46・5・31。三木喜代子の選挙違反事件を扱ったもの）、「秋の女」執筆（原稿に8月の日付）。また、この時期、「馬」を執筆（逝去後に『文学雑誌』に掲載）。他に「果実」、「従卒物語」「春夏秋冬」「死ぬることは愉しかったが 生きることはなるほど苦しいわい」などの原稿を何度も推敲する（改稿して発表したものもある）。

47年（昭和22年） 43歳

一月一日織田作之助死去（一九一三・一〇・二六生）。三月、吉本興業を退職（退職金七四五二円。小野十三郎は一〇月退職とある（寺島珠雄による著作集年譜））。三月、教育基本法、学校教育法公布、五月、日本国憲法施行。

一月、「落葉」（『文学雑誌』1巻2号、掌編、戦地からの夫の帰還を待つ妻の心情を描く）。五月「夢」（妹と武田麟太郎の死を書く）、「花火——織田君への感傷」（『文学雑誌』1巻3号（織田作之助追悼号）。七月「言葉」（『文学雑誌』1巻4号、「私は民衆と共に民衆の言葉で書きたい」と記す）。九月「続・言葉」（『文学雑誌』1巻5号、世直しについて）。

一月「大阪の女」（『主婦の友』31巻1号）。三月「小指」（『読物と漫画』42巻1号、桂新団治と娘お種、吉公の物語）。四月「女主人」（『文明』第2巻3号、田宮虎彦編集、21頁分の中編。和歌山での軍隊生活を題材としたもの）。四月「ものぐさ」（『芸能往来』2巻4号）。四月「ある青年の話」（『K・O・K（キョート・オーサカ・

コーベ) 2巻3号、3・4月合併号)。五月「歌劇乙女」(『水曜』1号)。六月「当世やくざ気質」(『大都会』1巻1号)。六月「寝ていた子供」(『子供と社会』創刊号)。七月「ヴィナスの誕生」(『芸能往來』2巻7号)。八月『大阪の女』刊(白鯨書房、234頁。下高原健二装幀、「大阪の女」秋の感情)「お蝶花助」など九編と、「滑稽譚」『大阪のサラリーマン』など短編七編、計一六編収録)。九月「五月の薔薇」(『太陽』1巻4号、扉にグルモンの詩を掲げる)。一〇月座談会「大阪を語る」(藤澤、田村、小野、長沖、秋田、瀬川、『K・O・K』7号)。

九月二五日『毎日小学生新聞』第3237号から少年小説「生きている絵」連載(一九四八年一月一三日、第3327号まで九一回にわたる。のち単行本)。同新聞は瀬川健一郎が編集者として長沖に依頼。連載小説には多くの作家が登場し、懸賞受賞作の掲載も行われた。⁵⁾

一〇月「大阪の小説と小説家」(『日本美術工藝』54号)。十一月「この人を見よ」(『四国春秋』2巻13号。編集後記に「氏の持ち味を十分に生かした異色あるもの」と記されている。たくましく生きる女性の姿を描く)。

一二月「朱ら引く」(『大和文学』第1集。軍隊での経験を題材とする)。一二月『文学雑誌』1巻6号に「瀬川健一郎君の『大阪の灯』」。一二月、『太陽』1巻7号に「寄席演芸」。

七月より『武田麟太郎全集』(武田麟太郎全集刊行会編、六興出版、全16巻のうち12、15、16巻未刊)、編者は川端康成、藤澤、高見順、新田潤、長沖の五名(6巻を除く各巻に解題あり。編者としか記載されていない。月報に長沖「若い頃」執筆)。

新聞連載小説「虹と蝶々」(『新世界』新聞)。「花に聴かん」(同、連載一五〇回、絵・下高原健治(健二))。

八月二三日NHK JOBK特別ローカル軽演劇・長沖一作「或る夜の出来事」(三〇分番組)放送。NHKラジオ、藤澤桓夫「大阪千一夜」脚色。

48年(昭和23年) 44歳

三月 帝塚山の庄野潤三郎に藤澤、庄野英二・潤三兄弟らと七人で集まる(寄書『春泥集』となる)。四月、帝塚山学院女学校および高等部講師となる。五月三十一日母さと死去。『婦人生活』6月号「子供に捧げた生命」で追悼する。

一月「断橋(第一回)」(『文学雑誌』2巻1号)、四月「断橋(長編第二回)」(『文学雑誌』2巻2号(長編)とあるが未完のまま中断)。四月「横光利一氏の追憶」、「石塚茂子さんの小説集『人魚』」(『文学雑誌』2巻2号)。六月「田木繁君の『私一人は別物だ』」(『文学雑誌』2巻3号(9号))。一月「織田作之助の思い出——一周忌」(一月十日)を迎えて——(『新大阪』1月9・10日号)。

一月「降誕祭物語」(『男女』2巻1号)、「大晦日」(『太陽』新春読物特大号)、二月「女のたたかい」(『裸像』第1巻1輯)、「道頓堀川 大阪物語」(『東京』4巻2号)、三月「失へる貞操」(『おうる読切』一九四八年3月号)。三月「若い女性へ」(『歌劇と映画』3巻3号)。三月「文学座談会・藤澤・長沖両氏を囲む会」(『鉤深』1号、四月「けったいな見合の話」(『物語』3巻4号、中日新聞社)。「映画と小説を語る(人気スター・作家・詩人の座談会)」(『男女』2巻4号)。五月「あなたは何か欲しいか」(弘文社、260頁。「バックミリアの中の人生」から「明日」まで15章で構成されている)刊。五月「バラ子と猫と」(『読物サロン』創刊号)、「首吊りざんげ」(『男女』2巻5号)、「浮気について」(『読物界』創刊号)、「在阪の詩人・作家たちと語る」(『高風』15号)。

六月「太宰治羽化説」(『大阪日日新聞』6月18日号)、「女の泥濘」(『太陽』2巻6号)、「或る告白」(『フレッシュ』1巻1号)、「ひまわり」(『読物界』1巻2号)。七月「恋わたる」(『読切小説』第1集)。七月「火中の娘」(『オール物語』1巻2号)。八月「浮気の蟲」(『別冊太陽』第1号。花助、徳利、お蝶など芸人の世界をテーマとする。『大阪の女』の「お蝶花助」とつながる連作)。八月「織田丈六の俳句」(『太陽』2巻8号)。八月「右

腕の青春」(『小説タイムス』1号)。九月「若い女性へ」(『花言葉』1号)。一〇月「白痴美」(『太陽』2巻10号)、「海と青春」(『実話と講談』1巻2号)。

一〇月『生きてゐる絵』(少年小説、連載小説単行本化) 高島屋出版部。一〇月「せりあい傳馬の記」(牧村史陽編『大阪弁第二輯』清文堂書店)。一二月「魔女」(『別冊太陽』第2集)、「現代風」(『特選傑作読物集』1巻1号)、「虹」(『面白倶楽部』1巻9号。中学校を舞台、校長と父母の関係を描く)。一二月「小説家長沖一先生を囲んで」(『感性』創刊号、武田薬工労働組合)。一二月「鴛鴦の宿」(『太陽』2巻12号)、「バッテリー人生」(『野球』2巻1号新年号、第1回。連載開始)。一二月「世界文学に現れた恋愛思想の変遷」(藤澤桓夫編『新女性文芸読本』千代田出版社)。

この年、他に、NHKラジオ、織田作之助作「ニコ狎先生」脚本。座談会「映画と小説を語る」(上原謙、轟夕起子、長沖、小野十三郎。『男女』一月)など。

49年(昭和24年) 45歳

九月 長男・博生れる。九月 NHKラジオ「上方演芸会」始まる。

一月『愛憎交響楽』刊(弘文社、『あなたは何か欲しいか』の再版)。一月「鳥は雲に」(『読物界』2巻1号)。二月石濱恒夫、吉田定一らによる座談会「二十代の文学」を駒井五十二と司会(『文学雑誌』10号)。二月「天使」(『太陽』3巻2号)。三月『文学雑誌』3巻3号に「サインブック」(目次には小説欄巻頭、小説の題材にふれる)。三月「公魚と蟹」(『家庭と料理』18巻3号)。四月「雙生児」、「若い信徒」(六号雑誌欄)(『文学雑誌』3巻4号(通巻12号)。四月「未完の画像」(『日光』2巻4号、花形作家読切小説傑作集)。四月「少年選手感激美談・白球に誓う」(『少年ボールフレンド』1巻1号、連載開始)。

五月「春の牝狐」(『太陽』3巻5号)。五月「女性と文学」(『生活科学』2巻5号)。六月「見合二重奏」(『主婦之友』33巻6号)。七月「花は紅、柳は緑」連載開始(『陽炎』1巻1号)。七月「可愛い女」(『大衆小説界』3巻7号)、「鳥は雲に」(『読物界』7月号)。七月「卵とあなた」(『陽気』7月号)、座談会「大阪娘・恋愛と結婚を語る」(『主婦之友』33巻7号)。八月 座談会「文学の行方」(小野十三郎、鳥尾敏雄、杉山平一らと)、「三番と四番」(随筆)(『文学雑誌』3巻7号、7・8月号)。八月「子供をめぐる愛情」(『鉤深』4号、大阪地方警察学校校友会)。八月「短歌の生命」(『あめつち』4巻8号)。九月「緑の誘惑」『ロマンス』(4巻9号)。九月「文学的出発」(『創芸』1号)。一〇月「恋人を求む」(『小説倶楽部』4巻8号)。「真昼の円舞曲…悲恋模様」(『陽気』1巻6号)。一〇月「あひびき」(『微笑』3巻3号)。一二月「青春の舗道」(『ラッキー』2巻12号)。この年、「酔いどれ月」「恋人を求む」などの小説がある。

四・五月「風景」(一)(二)(『白燕』)、七月「近江路」(『滋賀学園新聞』)、一〇月、座談会「ヴァラエティ・ショウの将来」(『放送文化』9巻9号)

五月二〇日 NHK「関西の皆様へ」で「郵便料値上げ対策二題」放送。NHKラジオコメデイ「知らぬが佛」、植林コント集「二十年後の日本の山」、「東西味自慢」、「道頓堀」など放送(この時期、他作者の放送脚本も手がける)。

八月 映画『悲恋模様』(松竹、月丘夢路、小貝彩子、佐野周二他)公開(原作『愛憎交響楽』)

50年(昭和25年) 46歳

四月 帝塚山学院短期大学の開学に伴い教授、文芸専攻主任に就任。六月 朝鮮戦争始まる。

一月「お家はん」(『主婦の友』34巻1号)。一月「接吻すべからず」(『小説読物街』2巻1号)。二月「美貌の

饗宴」(『小説読物街』2巻2号)。三月「ラブ・レター」(『婦女界』38巻3号)。六月「悪女の店」(『小説公園』1巻3号)など。一月から新聞に「作品抄」連載(文芸作品の短評)。一〇月、この年NHKラジオ「窓」放送、九月「気まぐれレショウボート」放送開始(秋田實と作・構成担当)。

一〇月 日中友好協会大阪支部総会で講演予定(直前に関係者検挙され中止)。

51年(昭和26年) 47歳

九月 サンフランシスコ平和条約、日米安保条約。一〇月 次男・渉生まれる。

三月「催淫劑(アフロディジャック)」(『小説公園』2巻3号)。一月「文学お国自慢」(『別冊小説新潮』5巻14号)など。四月「花花」(『白燕』)。五月二、四日、風流座第1回公演(関西在住画家・文人の演劇。三越ホール)出演。この年、NHKラジオ「蜜」、「筏師の村」、「ラジオ風土記」、放送劇「特急つばめ」、「地底に光る」放送。九月一日 新日本放送(一九五八年に毎日放送と改称)放送開始。

52年(昭和27年) 48歳

一月七日 NHKラジオ「アチャコ青春手帖」公開放送開始(第2放送↓第1放送。一九五四・四・五まで)。五月五日 NHKラジオ、ヴァラエティ・ショウ「オリンピック行進曲」放送(花菱アチャコ他)。五月三、五日、風流座第2回公演、九月二三日NHKラジオ、コメディ「おばあさんのお彼岸詣り」。他にNHKラジオ「五十歩百歩」、「花の中」、「指輪」など放送。

三月「お笑い三洋亭」(新日本放送)開始。一月「ユーモア風車」(朝日放送)開始(。一九五三・三・一八)。八月、映画『アチャコ青春手帖』、一月『アチャコ青春手帖・大阪篇』公開(原作)。

53年（昭和28年） 49歳

一月「浪速風土記」（『小説新潮』7巻1号）。五月「ミス焼きいも」（『講談倶楽部』5巻6号）。NHKラジオ絵葉書「船の旅」放送。

九月六日「五九童のおばあちゃん」（お笑い三洋亭、東五九童他）一九五四年八月まで。一〇月「アチャコ先生よい先生」（『少女』9巻10号）連載。

三月 映画『アチャコ青春手帖第三話・まごころ先生の巻』。六月『アチャコ青春手帖第四話 めでたく結婚の巻』公開。

54年（昭和29年） 50歳

四月大阪市立大学家政学部講師（一五五年三月）。七月大阪文学学校講師。

一月「やんちゃ娘行状記」連載開始（『婦人生活』8巻1〜11号。単行本化）。一〇月『放送文化』9巻9号で秋田實らと座談会「ヴァラエティ・シヨウの将来」。一二月『やんちゃ娘行状記』東京文芸社。

四月 NHKラジオ「アチャコほろにが物語 波を枕に」放送開始（一二月まで。A・ドーデーの『川舟物語』を翻案したもの。企画はNHKの大村三郎。地味と言われたが聴取率49%）。

一二月一三日 NHKラジオ「お父さんはお人好し」放送開始（一五六五・三・二九まで一〇年四ヶ月。月曜二〇時〜二〇時半。国民的人気となる。花菱アチャコ、浪花千栄子他出演）。九月五日 新日本放送「アチャコ叙伝」（お笑い三洋亭、一九五五・四・二四）。一〇月四日同「五九童のワンダフルおばあちゃん」（一九五五・八）。

この年、『毎日中学生新聞』の読者欄選者として批評担当。「文学とユーモアについて——人間精神の復活——

笑い」発表（『講演通信』）。

55年（昭和30年） 51歳

この頃から高度経済成長始まる（同時に低所得層拡大）。二月二十六日、「青い季節」連載開始（『サンケイスポーツ』創刊号〜九・二二まで二〇八回）。四月二四日でお笑い三洋亭「アチャコ自叙伝」終る（三年半）。九月五日「青春ワンダフルおばあちゃん」開始（〜一九五六・二）。

九月「嬢はん体当たり」『婦人生活』（9巻9号）連載開始（〜10巻6号）。

この年、「新婚五月晴れ」「ホームラン人生」（二五回）、「ミスターW氏とミスM子」（一七回）、「そよ風のように」（翌年まで二五回、いずれも新日本放送）などの脚本を書く。

一月 映画『やんちゃ娘行状記』（東宝、青山京子、古川緑波他）、一月 映画『花嫁立候補』（東宝、同）、九月『お父さんはお人好し』（大映京都、アチャコ、浪花他）公開。

56年（昭和31年） 52歳

一二月 大阪府芸術賞受賞。『文学雑誌』に「虫垂炎記」を書く。

六月「週刊サンケイ」6月10日号で藤澤桓夫と対談、『肉性交響楽』等に再度ふれる。

五月『お父さんはお人好し』東京文藝社版。七月『嬢はん体当たり』東京文藝社刊（『婦人生活』連載小説と長篇「群青」収録）。八月「漫才のおかしみ」（『言語生活』59号）。

四月、傳田雅子編『足音』（児童詩集第一集）に「傳田雅子さんとその幼い友だちへ」寄稿。

三月五日「ワンダフルおばあちゃんとフエ太君」（新日本放送）一〇月まで、その後同シリーズ一九五七年五

月まで続く)。七月「女ごころをたれか知る」(新日本放送、蝶々・雄二他、〓一二月まで二六回)。七月 NHKテレビ「御寮さん物語」(〓一二月)など。二月「コント千一夜」(四人で脚本分担執筆、大阪テレビ〓一九六一・九まで)。一月「もうかりまっかのメッカ―大阪商人の中心街をゆく」(『週刊サンケイ』11月4日号)。
二月 映画『お父さんはお人好し かくし子騒動』、『同 産児無制限』、五月『同 優等落第生』(大映京都公開)

57年(昭和32年) 53歳

一月連載小説「お母さんただ今」『読切倶楽部』6巻1号(三世紀社、絵は柳原良平。一六回連載〓翌年四月、7巻4号まで。タイトルに「明朗青春」「青春哀愁」が付せられる)。

二月『緑の誘惑』東京文藝社刊(連載小説「青い季節」を改題して単行本化)。

五月「盛り場文壇盛衰記―道頓堀の巻」(『別冊小説新潮』11巻7号)、「魚すき『丸萬』」(『あまカラ』69号)。
六月「祝辞の名手」(『文学雑誌』25号)、「私の貧乏物語5」(『国際新聞』6月11日)。(この時期、「お父さんはお人好し」に関連して雑誌の座談会等に登場する)。

五月九日 新日本放送「ワンダフルお嬢さん」放送開始(〓一月、横山エンタツ他)。

58年(昭和33年) 54歳

一月「生活に即した『笑い』」(『文学』第26巻1号、岩波書店)。六月「困りながらの食べもの談義」(『あまカラ』82号)。一〇月 座談会「お父さんはお人好し」(『主婦と生活』13巻10号)。

一月六日 NHKテレビドラマ「梅・桃・桜」(〓三月末まで)。二月二日 新日本放送「御存じ大岡政談」(〓

七月二七日まで、八話二六回、中村扇雀他)。四月、NHK「上方お笑い劇場」開始(香住春吾、秋田、長沖ら執筆)。七月一六日 上方お笑い劇場「陽気な尼さん」(笠置シズ子他) 放送。

一月二二日 NHKテレビ放送上方お笑い劇場「カナリヤさん今日は」(ミス・ワカサ、鳥ひろし他、学校を舞台) 放送開始(一九五九年九月まで四一回。三〇分番組、一二月二四日のみ名古屋CK)。九月「うちのおとうちゃん」(『少女ブック』8巻12号)連載)。

二月 映画『お父さんはお人好し 家に五男七女あり』、三月『同 花嫁善哉』(東宝)公開。

その他、三月「しぶちん大将」(上方お笑い劇場)、「家を離れてみたもの」など、この年多数の単発の放送脚本を執筆。「お父さんはお人好し」聴取率全国一位が二〇〇回を超え、NHKから感謝状。この頃、放送ドラマを三本並行して進める状態であった。

59年(昭和34年) 57歳

三月 昭和三三年度日本放送協会放送文化賞受賞、一二月 昭和三四年度大阪市民文化賞受賞(当時、庄野潤三は手紙に「菊池寛賞がふさわしい」と書いた)。一〇月七日盲腸炎で入院・手術(腹膜炎併発し五〇日入院)

三月 毎日放送テレビ「うちのおばあちゃん」(六月、東五九童他)。四月(対談)「マイクはなれて」(『放送文化』14巻4号)。九月三〇日 NHK「カナリヤさん今日は」終了。一〇月「目じるしはおしゃべり電話」開始(三月末)。一二月同「アチャコ武芸帖」(原作のみ、脚本は木村武)二月、毎日放送テレビ本放送開始。同月に花登筐脚本「番頭はんと丁稚どん」も開始された。

60年(昭和35年) 56歳

一月 日米安保条約改定、安保闘争。二月「かけあし旅行記」(『温泉』28巻2号)。六月「親としての反省」(『月刊保育カリキュラム』9巻6号、巻頭「ずいそう」欄)、七月「そぞろ京都」(白井喜之介編『新編随筆京都』白川書院)。一二月二〇日「貧乏物語」(『あの頃』、新聞随筆)。

四月NHKテレビ「親馬鹿ちゃんりん」(脚本、一九六一年三月末)。

61年(昭和36年) 57歳

七月三日 父・英一死去。

七月二一日、「父の死」(『読売新聞』夕刊)。七―十二月「おしゃべり電話」(『公衆電話』25―29号)。

七月「猫も杓子も」(『なにわ号』)。九月「喜劇放送の本質をつく」(『放送文化』9巻9号)。一一月『文学雑誌』30号に随筆「虫垂炎記Ⅰ」。九月『お父さんはお人好し』(春陽堂文庫出版)。追想文『庄野貞一先生追想録』(帝塚山学院)。六月淡谷のり子と対談(『新週刊』)。

一月一日「初笑い西遊記」(毎日放送テレビ、共同)。二月「東男に京女―西鶴・萬文反古より―」(毎日放送テレビ)。五月「幸福がいっぱい」(『読売テレビ』、一九六二年一月まで。共同)など。

62年(昭和37年) 58歳

七月一九日 四〇年近く住んだ姫松の家から、妻の実家のある羽曳野市萱田に転居(自然のある暮らしを喜ぶ。「朝寝坊のわたし」が、こっちへ移ってから六時には目が醒めてしまう)―「転居」。くるみ、柿、金ぐさりなど、たくさんの木を植えた。三月「虫垂炎記Ⅱ」(『文学雑誌』31号)。五月「虫垂炎記Ⅲ」(同32号)。九月、随筆「転居」(同33号)。

四月 NHKテレビ「おいでやす」脚本（一九六三年三月）。一〇月 天理教青年会本部出版班編『僕のインタビュ―——中山善衛対談集』（天理教青年会刊）に対談収録。

63年（昭和38年） 59歳

四月『文学雑誌』35号に「虫垂炎記（補遺）。この号で長沖一編輯発行人を終わる（のち吉田定一逝去後再度編集発行人となる）。二月『サンケイスポーツ』東京版創刊に「七曜小説」として週一回月曜執筆（「通天閣」「御堂筋」「心ぶら大将」など）。六〜七月連載小説「青春旅情」『さくらタイムス』（7月号で完）。

64年（昭和39年） 60歳

一月二二日 NHK講談ドラマ「欲の皮——西鶴 懐硯より」放送。
二月「湯かむり唄・その他」（『温泉』32巻2号）。六月「水と火の征服者―黒四水力と姫二火力を見て」（『サ―ビスに生きる——関西電力』フジ・インターナショナル・コンサルタント出版部）寄稿。

65年（昭和40年） 61歳

三月二九日 NHK「お父さんはお人好し」放送終了。五月「あした浜辺を」（末尾に「小さい話1」（『文学雑誌』40号）。

九月「弔辞」（『番傘』54巻9号、岸本水府追悼号）、一〇月「大阪のバンザイ」（『あまカラ』170号）、『放送年鑑』（日本放送作家協会）に「演芸番組私見」を書く。

66年（昭和41年） 62歳

一月 帝塚山学院大学設置認可、四月二三日 開学、初代文学部長となる（「文学」等を担当）。

一月 「自由大学から短大へ」（『帝塚山』第3号、創立50周年記念号。帝塚山学院。「回想五十年史」欄 48―50頁）。
一二月 『大阪／神戸 日本の旅13』（座右宝刊行会編、小学館）に随筆「大阪1町と人」掲載。

67年（昭和42年） 63歳

八月「お互いに鏡」（随想、『月刊保育カリキュラム』16巻8号）、一二月「恩師の思い出」（『大高 それ青春の三春秋』86―89頁）。

この頃、「大阪ロマン——生きている近松・西鶴（今は昔）」執筆。

68年（昭和43年） 64歳

四月 帝塚山学院大学日本文学科講座整備により「創作研究」講座、「新感覚派の文学を中心に」などの科目担当（『日本文学科の十五年』）
三月、ヨーロッパ旅行。この頃から学生運動次第に激しくなる。

一月「空想飯店——ヘソマガリ料理人会」『あまカラ』197号（二頁の囲みのもの）。七月「わが青春の糧——築地小劇場のこと」（『かんげき』創刊号、帝塚山学院大学）、一二月「正月の大阪十日戎の賑わい」（『旅』48巻12号）。一月『大阪の百人』（毎日放送刊）に長沖紹介。

69年（昭和44年） 65歳

四月「ヨーロッパ見物——ごくお粗末な その1」（『文学雑誌』46号、のち「ヨーロッパの夏・一九六八年」

に改題)。一〇月「ヨーロッパ見物 その2」(同47号、一一〇枚の原稿)。

70年(昭和45年) 66歳

六月「『辻馬車』復刻版刊行(日本近代文学館、小田切秀雄編、別冊に藤澤、神崎、小野勇、長沖の回想と、瀬沼茂樹による解題がある。長沖「藤澤桓夫を中心に」)。

一二月「織田作之助『青春日記』(昭和一三年三月一日—七月二四日)」に序言を執筆(凡例・山田博光、『日本文学研究』帝塚山学院大学文学部日本文学会、第3号、24—47頁)。

七月「文学雑誌」48号(吉田定一追悼号)の編集を全面的に担当し編集後記も書く。追悼記「さまざまの……」掲載。逝去まで再度編集発行人。この年七〇年安保、六月安保条約自動延長となる。

71年(昭和46年) 67歳

一二月「実行力あるアイディア・マン」を『追悼文集 大宅壮一と私』季龍社に寄稿。一二月「歳末忙中閑」(二月九日)等新聞に執筆。

72年(昭和47年) 68歳

二月「風流珍優譚」(『さやま』7号)。三月 書評「庄野英二作品集『白い帆船』」(『日本文学研究』第4号、54—55頁)。五月沖繩返還。

一二月『文学雑誌』50号(25周年記念号)に「おお ハンカチーフ!」執筆。長沖の編集後記は二頁にわたる(「私が今号の編集を買って出たのは、なによりもまず、ゾボラものの私が、何よりもこのゾボラな雑誌を愛して

いるからである。』。

73年（昭和48年） 69歳

一月「上方笑芸見聞録」連載開始（『放送朝日』二二四～二四七号。朝日放送出版部長の鬼内千次からの企画で一年の予定であったが、二年に延長し一九七四年二月まで二四回）。三月「あれもいかんこれもいかん」の時代——戦争中のこと——」（『上方芸能』28号）。九月『随筆集「大阪賛歌」』（ロイヤルホテル）に随筆「このヴァイタリティ」掲載。一〇月オイルショック起こる（高度成長の終焉）。

74年（昭和49年） 70歳

四月 帝塚山学院大学のカリキュラム拡充で「日本文学特殊講義a（体験的文芸論）」、「日本文学演習1e（森鴎外の翻訳作品）」、「日本文学演習IIe（作家と作品）」を担当（「日本文学科の15年」）。

一月一二日「父ありき」（『朝日新聞』インタビュー記事）。三月「アチャコ青春手帳」以後——わたしの放送作品」（『上方芸能』34号）。八月 NHK、朝日放送テレビにゲスト出演。

75年（昭和50年） 71歳

四月一日 帝塚山学院短期大学学長に就任（大学は兼任教授。庄野英二が大学学長就任）。この頃より腰痛を訴える（がんの転移）が、ヘルニアと診断され原因分らないまま日が過ぎる。四月 ベトナム戦争終結。長男・博、ドイツ留学より帰国、父の送迎を行う。一〇月「浪花千栄子さんのこと」（『大阪春秋』8号）

76年（昭和51年） 72歳

七月二〇日 藤井寺市民病院に入院、八月五日同病院で肺がんのため死去。一〇日妙経寺において葬儀（勲四等旭日小綬章授与）。八月、富士正晴「長沖一の死と周辺」（『読売新聞』三〇日）で長沖が最後に書きたいと話していた小説西鶴を書く前になくなったことを惜しむ。九月「長沖一学長を悼む」帝塚山学院短期大学（奥付なし）。九月一日追悼式冊子。九月『上方芸能』48号に長沖一追悼特集（「又も綴る夏の点鬼簿」、藤沢、小野の弔辞掲載）。一〇月 富士正晴「長沖一」（『文芸』15卷10号）。十一月『帝塚山学院創立六十周年記念誌』（同学院刊。編集委員長として最後の仕事となる）。一二月『さやま』第15号「長沖一先生を悼んで」刊。長沖家の廊下には「砂丘 花なく 貝殻にも春 惜しむ 長沖一」の色紙がかかっていた。

77年（昭和52年）

三月 長沖一・庄野英二「対談 わが有為転変（仮題）」（『日本文学研究』第8号、11―24頁）死後刊行される（のち『上方笑芸見聞録』に収録）。

四月『文学雑誌』第55号、長沖一追悼号（年譜、作品目録と長沖の戦前、戦後初期短編、俳句等掲載される。編集後記は杉山平一、瀬川健一郎。編集発行人・杉山平一）。

78年（昭和53年）

六月 遺著『上方笑芸見聞録』出版（九藝出版、あとがきは長沖渉）。

一二月 小野勇「書評らしい随想——長沖一著『上方笑芸見聞録』を読んで」（『こだはら』創刊号）。

79年（昭和54年）

一二月 鶴見俊輔『太夫才藏伝——漫才をつらぬくもの』（平凡社）で秋田、長沖を取り上げる。

81年（昭和56年）

一〇月「肉体交響楽」、『中央公論』10月号に全文掲載される。同誌に司馬遼太郎「昭和五年からの手紙―長沖」とその世代環境」（解説論文）掲載。

一二月 小野勇「長沖一『肉体交響楽』のこと」（『こだはら』4号）。

84年（昭和59年）

一〇月〜一九八五年三月 秋田実と長沖一をモデルにしたNHK連続テレビ小説『心はいつもラムネ色』放送。

85年（昭和60年）

一月『日本プロレタリア文学集19 「戦旗」「ナツプ」作家集6』（新日本出版社）に「夜」「母子一景」収録される。解説で佐藤静夫は「この時代の現実を深いところから捉えようとする作者の筆として注目される」（513―514頁）と述べている。

89年（昭和64年）

三月「昭和63年度上方芸能人顕彰」受彰。

95年（平成7年）

五月「馬」、『文学雑誌』69号に発表される（杉山平一があとがきで「馬」掲載の意義を書く）。

2000年（平成12年）

三月 杉山平一「文学者の帰郷」で秋田、長沖を取り上げる（『イリプス』1号）。

03年（平成15年）

四月一日―五月一日「大阪文藝 長沖二展」関西大学図書館で開催される。遺族より、長沖一関係資料寄贈、特別文庫に所蔵される⁶⁾（関係者からの寄贈を含む）。

（以後、いくつかの雑誌特集、論文等で長沖一が取り上げられている。）

注

表記は、読みやすさのため、人名等を除いて旧字体を常用漢字に改めた。

- (1) 藤澤桓夫は一九〇四年七月二日、武田麟太郎は一九〇四年五月九日、秋田實（林廣次）は一九〇五年七月一日生まれ。神崎清も一九〇四年、崎山正毅は一九〇三年の生まれである。なお、秋田實の名は実と両方用いられている。
- (2) 当時の作品発表の場であった『擲弾兵』『イスクラ』『1928』『1929』『1930』などの雑誌は、発禁になつたり秘密裡に刊行されたりしているため不明の号が多い。
- (3) 秋田、長沖の帰郷については、全協再建との動きや大阪での統一戦線運動の動きがあり、内野壯児が編集担当をした『労働雑誌』の関西支局（支局長・川上貫一）も設置されていることなどつながる面があるが、その後の活動については、当時の運動の状況や要注意人物として監視下での二人の仕事と、内的な思想的変化の両面からみて直接的な

関係はなくなつたのではないかと考えられる。なお、富岡多恵子の『漫才作者 秋田實』（65―69頁）に『特高月報』の報告にある全協刷新同盟派の秋田實の記載が引用され、同一人物の可能性が指摘されているが、『秋田實』は東京出身で組織活動をしていた人であり、神山茂夫研究会編『神山茂夫研究』第一号（一九七五年）に談話がある。もう一人同名の人物があるが、この人は朝鮮独立運動に取り組んでいた神学部出身の牧師である（『特高月報』昭和一六年二月分（三月刊）3―15頁、同六月分（七月刊）3―13頁）。この時期のことについては、今後さらに検討したい。秋田實や関係者の残した史資料によって今後解明が進められることを期待したい。

桜井武雄は、水戸出身で農業問題の研究で知られたが、東京で長栄館に住み、共に活動した同志であり、その後も長く交流があった。桜井も一九四四年に治安維持法違反で検挙された経験がある。

(4) 『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』『大阪日日新聞』『新大阪』『大阪タイムス』『新世界新聞』『夕刊岡山』などの各新聞や雑誌に多くの短編、コント、随筆、批評を掲載しているが、とくに一九四六年から四九年にかけて数多く執筆した。

(5) 『文学雑誌』の瀬川の追悼文では『毎日中学生新聞』に「白い馬」を連載したと記されているが、同新聞の発刊は一九四九年であり、その後も長沖の連載は見当たらない。瀬川は『毎日小学生新聞』の編集を担当していたので、「生きている絵」の記憶違いと考えられる。

(6) 所蔵資料には、原稿や新聞、雑誌切り抜き、句集、書簡などが多数あるが、その中には発表年月、誌名不明の切り抜きがある。また中断した原稿や修正中の原稿も含まれている。他に長沖家で保管されている資料もある。他にもドラマやバラエティの台本、脚本類、随筆、新聞への寄稿、藤澤らと行った句会の俳句、またテレビ、ラジオ番組へのゲスト出演もある。ここでは小説、評論、随筆作品を主とし、他は主なものだけを収録した。重要なもので脱落があるかもしれない。ご教示いただければ幸いです。

追記

研究会報告後に、肥田皓三氏からご教示をいただいた。記して感謝いたします。

主な参考文献（順不同）

- 長沖一『上方笑芸見聞録』九藝出版、一九七八年
長沖一特別文庫資料（関西大学図書館）、長沖家所蔵資料
『文学雑誌』55号（長沖一追悼号）、文学雑誌同人会、一九七七年（他、同誌各号）
『大阪市御津尋常小学校沿革誌Ⅱ 別編』同小学校、一九三六年、一九三八年
初田善三郎編『大阪府立天王寺中学校同窓会々誌』同会、一九三六年
大阪高等学校同窓会編『大高 それ青春の三春秋』同会、一九六七年、同『旧制大阪高等学校校史』同会、一九九一年
『東京帝国大学新聞』同新聞社および『東京帝国大学卒業生氏名録』昭和八年版、同大学
小田切進編『辻馬車』復刻版・別冊解説、日本近代文学館、一九七〇年（別冊に回想収録）
藤澤桓夫『大阪手帖』三島書房、一九四六年、『私の大阪』創元社、一九八二年、『大阪自叙伝』朝日新聞社、一九七四年、
『回想の大阪文学』明治・大正・昭和の大阪文学を語る』ブレーン・センター、一九八三年、他
秋田實『私は漫才作者』文芸春秋、一九七五年、秋田実『大阪笑話史』編集工房ノア、一九八四年
藤田富美恵『父の背中』潮出版社、一九八七年
庄野英二『帝塚山風物誌』垂水書房、一九六五年
庄野潤三『文学交友録』新潮社、一九九五年
花菱アチャコ『遊芸稼人——アチャコ泣き笑い半世紀』アート出版、一九七〇年
吉田留三郎『かみがた芸能——漫才太平記』三和図書、一九六四年
富士正晴『極楽人ノート』六興出版、一九七九年
大谷晃一『評伝・武田麟太郎』河出書房新社、一九八二年
富岡多恵子『漫才作者 秋田實』筑摩書房、一九八六年
小野十三郎（寺島珠雄編）『小野十三郎著作集第3巻』筑摩書房、一九九一年
司馬遼太郎『昭和五年からの手紙——長沖一とその時代』『中央公論』一九八一年一〇月号（『ある運命について』中公文

庫、一九九五年に収録)

鶴見俊輔『大夫才蔵伝——漫才をつらぬくもの』平凡社、一九七九年

石堂清倫・豎山利忠編『東京帝大新人会の記録』経済往来社、一九七六年

中村勝範編『新人会の研究』慶応大学出版会、一九九七年

NSクラブ(新人会同窓会)編『東京帝大新人会員の足跡』創造書房、一九八七年

渡部徹『日本労働組合運動史——日本労働組合全国協議会を中心として——』青木書店、一九五四年

労働運動研究所編『全協刷新同盟の問題 内野壯児追悼集』内野薫子発行、一九九一年

佐野英彦『戦前の階級的労組・全協時代への回想』私家版、一九八八年

『吉本80年の歩み』吉本興業株式会社、一九九二年、『大衆娯楽雑誌 ヨシモト』復刻版、吉本興業、一九九六年

NHK大阪放送局70年史編集委員会編『NHK大阪放送局七十年——こちらJOBK』同放送局、一九九五年

毎日放送40年史編纂室編『毎日放送の40年』毎日放送、一九九一年

早坂隆『戦時演芸慰問団わらわし隊の記録——芸人たちが見た日中戦争』中央公論新社、二〇〇八年

『帝塚山』第3号(創立50周年記念号)、帝塚山学院、一九六六年

『創立十五周年記念誌』帝塚山学院大学、一九七二年(『日本文学科の15年』他)

『帝塚山学院年譜』帝塚山学院、一九九六年

井上宏編『放送演芸史』世界思想社、一九八五年

棚橋昭夫『けったいな人々——ホンマモンの芸と人』浪速社、二〇〇〇年

戎谷春松『秋田実・長沖一の思い出——秋田実の七回忌によせて・下』『大阪民報』二五三九号(一九八四・一〇・一三

日号)

丹羽道雄『秋田実に関するメモ』(『東京帝大新人会研究ノート』第7号、一九八五年)

丹羽道雄『富岡多恵子』漫才作者・秋田実』を讀んで』(同第8号、一九八六年)

浜田善盛『小高保と末期の全協——浜田善盛氏に聞く』(『運動史研究』6、三二書房、一九八〇年)

平井巳之助『名もなき者の記録——私の運動史』田畑書店、一九八一年

内務省警保局保安課編『特高月報』復刻版、政経出版社、一九七三年。

司法省刑事局編『思想月報』復刻版、文生書院、一九七二年

『上方芸能』28号（特集『冬の時代』の笑い）一九七三年

『上方芸能』56号（特集『漫才の栄光』秋田実の軌跡）一九七七年

『上方芸能』58号（特集吉田留三郎の死と総合芸能時代の終焉）一九七八年

『大阪春秋』155号（特集没後25年 回想の藤澤桓夫）二〇一四年

『大阪春秋』161号（特集帝塚山モダニズム）、二〇一六年

『Bookish』9号（特集「ラジオの時代——長沖一とその周辺」二〇〇五年（中尾務「モダニスト長沖一——初期作品について」など掲載）

室伏志畔「お笑い作家の誕生…長沖一と秋田実」、『季報・唯物論研究』117号、二〇一一年

鶴崎裕雄「長沖一先生と大阪・帝塚山——史料としての通俗小説の魅力」『こだはら』37号、帝塚山学院大学、二〇一五年

浦西和彦、増田周子、荒井真理亜『大阪文藝雑誌総覧』和泉書院、二〇一三年

日本近代文学会関西支部同編集委員会編『大阪近代文学事典』和泉書院、二〇〇五年

NPO法人インテリジェンス研究所、二〇世紀メディアデータベース

小野勇、崎山猷逸、崎山正毅をはじめとする関係者の方々の各誌における回想。